



第 12 号

2015 年 3 月 15 日

会 員 募 集 中	年 会 費 二 千 円	十 月 以 降 入 会 千 円
-----------------------	----------------------------	--------------------------------------

定期総会 記念講演二題

三島中洲と高杉晋作

今年の定期総会を下記の通り予定しています。記念講演は二題、「教育者三島中洲～山田方谷の門下生」と「風雲児高杉晋作～吉田松陰の門下生」です。

三島中洲の講演は会員の雪吉政子



▶高杉晋作写真(下関市立東行記念館蔵)

氏にお願いしました。雪吉氏は中洲の出身地、倉敷市中島に居住し、三島中洲の顕彰活動を続けてこられました。次ページが頂いた紹介文です。

高杉晋作については下関市立東行記念館学芸員の瀬幹氏にお願いしました。高杉晋作は今年のNHK大河ドラマにも登場する一代の風雲児です。松下村塾で吉田松陰の薫陶を受け、初め、尊王攘夷の志士として活躍した。後に、農民らを集めて奇兵隊を組織し、江戸幕府の長州征伐に対抗した。

二九才の若さで早逝。死の前年に詠んだ「面白き事もなき世におもしろく・・・」という句は有名です。

平成 27 年度定期総会のご案内

日時 4 月 29 日 (祝日) **受付** 12 時 30 分～
場所 山陽新聞社さん太ホール

●総会 13 時～

平成 26 年度の事業報告、決算報告。
新年度の事業計画、予算(案)審議、
役員選出

●抜刀術演武 13 時 45 分～

初實剣理方一流甲冑抜刀術(津山藩伝来)
大河原喬氏(顧問) 含め 3 名

●記念講演(山陽新聞社後援) 14 時～

「教育者 三島中洲～山田方谷の門下生」

講師 雪吉政子氏(会員)

「風雲児 高杉晋作～吉田松陰の門下生」

講師 一瀬 幹(つよし)氏

(下関市立東行記念館 学芸員)

参加費 500 円

展 望 歴 研

備前平野に春を呼ぶ

と言われる西大寺会陽
から早一カ月近く経過
しました。岡山歴史研究

会も秋には設立五周年の節目になります。お蔭をもちまして会員は設立以来年々増加し、二八六名です。多くの会員を擁する団体として会の継続、発展を考えるならば体制整備は不可欠であります。

そこで、五つ目の常設委員会として、総会や探訪会等の開催を担当する事業委員会を設置するとともに、事務局も事務局長を含め四人体制に整備しました。更に顧問には、このたび元吉備国際大学教授で、今年度の岡山県文化賞を受賞された白井洋輔先生をお迎えし、専門的な立場からご指導、ご示唆をいただくことになりました。また、造山古墳蘇生会でご活躍の定廣好和会長にもご就任いただいております。

定期総会では、副会長三人体制をご承認いただく議案を予定しております。当日は記念講演に加え、津山藩伝来の抜刀術の演武も予定しておりますので多数のご参加をお待ちしております。(会長 天野勝昭)

山田方谷の門下生

教育者 三島中洲

雪吉政子(会員)

三島中洲は、江戸時代の末期、天保元年(一八三一年)十二月、現在の倉敷市中島(二八三一年)の庄屋に、父壽太郎、母柳の次男として生まれた。幼名は広次郎、貞一郎、長じて毅と名乗り、号は桐南、後に中洲と称した。

中洲の生家は、祖父、伝太郎以来庄屋であった。父、壽太郎は庄屋の任務をもって江戸出張中に死亡している。時に中洲八歳。中洲は十四歳まで生まれ故郷で過ごした。母子家庭で育った広次郎少年は、丸川松陰の養子、丸川龍達の塾で四書五経の素読を学ぶ。龍達の塾で山田方谷の漢詩に感激。十四歳の時、龍達と母親の勧めで松山藩の儒者、山田方谷の私塾、牛麓舎に入る。十九歳で塾長となる。後に伊勢、津藩の斎藤拙堂に、その後、江戸に出て昌平黌で佐藤一斎に学んでいる。この間、二十四歳で

備中松山藩士となり、二十九歳で備中松山藩の藩校有終館の会頭、後に学頭に就任している。

中洲は、藩主板倉勝静公の命で文久二年、鎮西(長州、九州)地方を探索し、各藩の漢学者等と交流(『鎮西観風詩録』)をしている。

彼は重野安繹(やすつぐ・号は成斎・薩摩藩)と川田養江(備中松山藩)とともに明治の三大宗(文宗とは文章・文学にすぐれて一派の祖と仰がれる人)の一人に数えられる。名前の由来は、山田方谷が門下の俊英として「剛毅」の二字を分け、川田に「剛」、三島に「毅」の字を与えたことによる。

母、柳の家庭教育法をよく調べてみると、中洲には生家で身につけたものが多く読み取れる。そして学問の場で多くの生涯の友を得ている。この間の学費はすべて兄、舒太郎からの仕送りでまかなわれた。

成人してからは、時に帰郷の機会があったが、九十歳の生涯から見ると殆どそれはまれだった。従って、地元の人にはあまり知られてない。

母、柳は金光町大谷村の大庄屋、小野光

右衛門の長女である。小野光右衛門は都にまでその名が知られていた。和算、暦数などの知識を備えるだけでなく、それを活用して、大庄屋の任務を果たしていた学者であり、政治家であった。彼は当時、大庄屋としての責務の傍ら若者たちが世の中に役立つ人になるよう努めていた。教育者としても優れた功績を残している。当時、農家の子どもだった金光教祖(赤澤文治)もその一人である。

三島中洲は陽明学者として知られている。幕末の志士、高杉晋作は基督教聖書を調べて「これは陽明学に似ている」と叫んだ、と内村鑑三が一八九四年に著した『代表的日本人』に書いている。陽明学は「知行合一」を提唱している。中洲はこの「知行合一」で生きてきたように思える。新政府に招かれて、判事や漢学者として東京師範学校や東京帝国大学で教授を務めている。

宮中で初めて陽明学を講じたのは彼であった。彼は明治二十九年六十七歳で東宮(後の大正天皇)の御用掛となり侍講を拝命し、東宮に漢詩を指導した。大正四年、八十六歳でその職を離れるまでの二十年間、祖父と孫程の年齢差の中洲に東宮様は心底ご信頼なされ、ご指導を受けられている。そして大正天皇は一三六七首の、歴代天皇の中では最多の漢詩を残されている。ある書に「大正天皇の漢詩は王者の風格をただよわせている」と書かれている。病弱

に生まれ、少年時代はひ弱であった大正天皇は老師に学び、前述したような評価を受けるのは中洲の真の教育者たる所以だろう。大正天皇は漢詩に得手ただけでなく、自由闊達なお人柄が漢詩の中によく読み取れる。中洲が八十歳を迎えた時の大正天皇の詩(明治四十二年)を紹介したい。

賀三島毅八十

白髪朱顔志益堅 朝朝說道侍經筵

後凋松柏堪相比 冒雪凌霜八十年

明治十年、四十八歳の時、高梁の旧宅を売却し、東京を終焉の地と定め、邸内に塾を興し、二松學舎と名付けた。これまでの漢文学、儒教の衰退を防ぎ、二十世紀で活躍する人材育成が目的であった。中洲の建学の精神、「義利合一論」に共鳴した渋沢栄一は理事長、吉田茂は第五代の学舎長を務めている。犬養毅(木堂)は門下生、後に顧問。また夏目漱石、嘉納治五郎、牧野伸顯らも門下生である。

校名「二松」の由来は生家の門に植えてあった二本の松からということとはあまり知られてない。先祖と母の墓地(實際寺)に「生齒の碑」がある。七十四歳の時、己を育んだ郷土、家族と終生共にという中洲の心を表したものと理解している。中洲は九十歳の生涯で二千七百首の漢詩を残している。生涯、師匠山田方谷の「至誠惻怛」の真心と慈愛の精神を守った。



▶三島中洲の写真

太田辰五郎と千屋牛

新見庄中世たたら学習実行委員会

委員長 橋本正純(当会顧問)

新見地方の牛、千屋牛は牛のブランドである。それを育て、有名にしたのが太田辰五郎である。辰五郎は享和二年(一八〇二年)太田家の六代目として千屋で誕生した。その頃の太田家といえば、田畑二千石あまり、十あまりの鉄穴場、山林をもち、千両箱を飛び石にして江戸まで行けると言うほどの金持ちであった。

辰五郎は家業を引継いで以来、厳しい世の中での移り変わりの中で知恵を絞り、生活安定の為、また、田拵えや鉄荷の運搬用としての役牛、即ち牛の飼育を奨励した。そして、改良、繁殖につとめ、ついに天保五年(一八三四)千屋牛馬市を開いたのである。その後、牛の販路も開拓し、全国に千屋牛を有名にした。



▶太田辰五郎翁肖像画

太田家の先祖は武蔵の国(東京都多摩地方)の豪族だった。後、津山藩森家の家臣であったが武士をやめ久世に閑居した。天保の頃、理佐衛門政重の時千屋に移住して鉄山業をはじめ、元禄の頃には資産をつくっていたのが千屋太田家のはじまりである。

鉄穴場とは砂鉄を採る場所。大きな溜池を造り、その水を井手に流し砂鉄を集める。それを火のついた炭の中に入れ、溶かして塊にする。ひとつの鉄穴場では水を流す者、土を掘って井手に流し込む者、砂鉄を集める物、砂鉄を燃やして塊にする者等五十、六十人は働いていた。家はおよそ三十軒。家族も入れると二百十人程がひとつの鉄穴場で暮らしていた。千屋の鉄穴場の家の数は千軒を超える。千屋の名はここから来た。

その頃は子供達も沢山いて、子らのために村には手習い所があった。読み書き、そろばんが教えられていた。辰五郎も村の子供と一緒に勉強をした。その頃も夏には盆休みがあり子供達は水浴びや魚とりをして遊んだ。辰五郎が得意だったのは岩の間にいる魚を手を入れて捕まえる(岩下握り)こと。仲間がびつくりするほどだった。ヒラメは大きくなればなるほど暑さに弱くな

る。水の温度が上がってくると、冷たい湧水のある場所に集まってくることを知っていた。何処から冷たい水が湧いてくるかも分かっていた。祖父の三左衛門に連れられて鉄穴場を歩き、水の湧く場所がどんな地形に成っているか良く教わっていたからである。

夏は、牛を川で洗う時期でもあり、辰五郎が牛に興味をもつきっかけになった。川原で牛を洗う若者がいて、その様子をそばで見ていた辰五郎、「危ない、坊」いきなり若者の手が飛んできた、二、三メートルは飛ばされた、「悪いのう、坊、怪我はないかのう」と気遣いながら「牛はなあ、真横に立ったら行けんのだけえ。牛は横に蹴るだけえのう。それも、まわし蹴りのようになあ。どえらい強い力だけえ、当たりどころが悪けりや死ぬこともあるだけえ」牛は知った者を見ると近づいてくるが、知らない者が急に近づくと、びつくりして攻撃する、馬は後ろに蹴るが牛は横に蹴る。だから牛は後から追って歩くと言う。特に真正面は見えないので、正面からは声を掛けながら近づかないといけなことを若者から教わった。自分は牛のことを何も知らない辰五郎は自分に言い聞かせた。

鉄穴場は馬が主力で動いていた。が、冬は雪が降り、道は滑りやすく成る。毎年、何頭かの馬が滑りこけ怪我をして死ぬ、馬は値段が高い、死ねばそれだけ損をする。

牛と馬とではどちらが鉄穴場士の仕事に向いているか牛買いに聞いてみた。速さで



▲牛市風景

は馬にかなわないが、仕事は牛の方がよくする。又、胸の筋肉が大きく発達して前足が短くて太い、これは坂道を歩くためには適しているという。それと、牛は胃袋が四つあり、草だけで栄養を十分取ることが出来るのである。「草は何処でもあるし坂道にも強い、わしは牛を使いたいんだが、てごをしてもらえんどうか」辰五郎は、牛飼いに頭を下げた。声をかけた牛飼いの名は林太郎。林太郎に、誰にでも使える牛を育ててもらうことをお願いした。「もともと牛はおとなしい動物なんですぞ。ただ、ちいと肝がこまいんです。それだけえ、自分がいじめられんように、早めに角で突いてくる。そのことをよう知つていて優しいゅうしてやりやあ、ちつとも恐いもんじやないんぞな、まあ、見取つてつかあさい」、と林太郎は答えた。その後、林太郎は一頭の雄牛を連れてやって来た。「こ



▲碁盤乗り千屋牛像(千屋ダム)

れが、わしの飼うとるコッテイ(雄の親牛)です、まあ、みてやってつかあさい」胸の筋肉が特に大きく、前足は太くて短い。肩より少し盛り上がった尻は、きりりと引き締まっていて、後ろ足はスマートだった。これなら坂道を歩くのに便利そうだと辰五郎は思った。「シッ」と声をかけると、頭を少し下げ歩き始め、「バアッ」と、声をかけると前足を揃え、後ろ足のひとつを半歩ずらせたまま止まった。そして牛の扱い方を林太郎から教わった。牛は人と会話が出来ると利口な生き物だと辰五郎は感心した。

文政六年(一八三三年)辰五郎二十二歳。山ひとつ越えた菅生の西谷の庄屋の娘、音羽と祝言を上げた、

この頃、大雨が降り続いたり、一滴も降らなかったり異常気象が続いた。米も、農作物も例年の半分しか取れない。「このま

んまじやいけん。鉄穴流しを休んでいる春から秋の間は米作りの時期なのに米が獲れなんだら村の人達は生きて行かれん。何とか他の仕事を考えないと。村が減びてしまふ」祝言を挙げながら辰五郎の頭の中はこのことで一杯だった。牛を沢山飼ひ、売ってお金を儲ける方法を考えよう。祝言が終わると、さっそく林太郎を呼んだ。「これだけ不作続きだと、みんなは、鉄穴流しに力を入れる。そうすれば、荷物を運ぶ牛もえつというようになると思う。どうか、牛を増やして売ろうと思うが」「親方、わしもそがにあに思いました。牛は草さえありゃあ飼える。牛の糞は田畑の肥になる。この肥で米が獲れるようになりゃあ暮らしが豊かになる」林太郎は眼を輝かせた。

辰五郎も、米も鉄も、炭も木材も、売るとなったら何かで運ばんといかん。牛は後ろから追うだけで良い。自分で歩けるから運ぶ必要がない、不便な山奥でも運べる。これなら商売になると考え、早速に動いた。先ずは、今の千屋の牛は二、三年に一頭しか子を産まないの沢山子を産む牛を探すことにした。釜の方にいい牛飼ひが居るといので訪ねた。釜とは神郷町釜村のこと

で、飼ひ主の名は難波千代平という。谷に入ると牛たちがいつせいに此方を見た。大きな角をした一頭が群れの先頭で立ち上がって身構えた。あれがボスだな、牛は群れると力の強いものから順に序列をつくって暮らすようになるという林太郎の言葉を思い出した、林太郎は毎年春には牛を戦わ

せ、牛を強い順に順番を付けた。荷物を運ぶ時ボスを先頭にすれば少ない人数でたくさん牛を連れて歩くことが出来るという。千代平と会った辰五郎は牛を見せてもらった。一年ごと子供を産むオナミ(雌牛)を一頭売ってもらって千屋に連れ帰った。

文政十一年(一八二八年)二十七歳の時父、正蔵の後を継いで、太田家の当主となった。これを機に本格的に牛の育成にのりだした。最初は牛を見て歩くことにした。

大阪・天王寺の牛馬市は数千頭もの牛が出ている、又、牛馬商人以外の人でごったがえししていた。牛だけの売り買いだけでなく、生活用品・野菜や魚・衣類小間物・桶からざる・はては犬・猫・金魚・なんでもあった。菓子屋・食い物屋・おもちゃ屋・芝居小屋から見せ物小屋・大道芸人までいた。辰五郎はこんなのは見たことがない。市を仕切っている石橋孫右衛門を名乗る実力者に会い、市の様子をあれこれ聞いた。牛で採算を合すのは牛市まで自分で開くことが最良だとこの時決意した。

千屋に帰った辰五郎、早速、林太郎を呼ぶ、「千屋で牛市を開こうと思うが、牛がいる。何年ぐらいで増やせるもんかのう」すると林太郎は「任せておくれんさい」と答えた。それから何日かして林太郎がやって来た。二年間はいいい牛を増やすために牛比べをしたいと提案した。今で言う品評会だ。預けて飼わせている牛を一堂に集め、褒美も出そう。人を集める為に見せ



▲太田辰五郎翁顕彰碑(犬養木堂筆)

昭和2年建立

のをやろうということになった。見せ物には、牛の序列を知るために林太郎がやっていた角突き、今でも隠岐の島や沖縄で行われている闘牛をやることにした。

第一回目の牛比べを天保三年(一八三二年)に開いた。集まった牛はわずか四十頭と寂しかったが、褒美は与えた。一等一名に米二俵、二等二名に米一俵、三等三名に米二斗。米二俵を金に換算するとおよそ一両。サラリーマン給料に直すと約三十万円になる。自給自足生活をしていた千屋では金など使う必要がない、これだけあれば一家が一年は楽に暮らせた。娯楽の少ない村人達は出来るだけ良い席を取ろうと朝早くからむしろを抱えて大勢やって来た。六百キ口近い牛が正面から激突する角突きが評判だった。次の年には二百頭を超える牛が集まった。余興の角突きもたいへん人気が出た。これなら牛市がやれる。早速準備にかかった。

倉敷代官所に牛市許可願を提出、近くは

勿論、但馬や播磨、大阪や名古屋の牛馬商に案内状を送り、露天商から芝居の一座、見せ物小屋や大道芸人達にも声をかけた。会場近くの農家に宿の提供もお願いし、空き地には牛の繋ぎ場もこしらえた。

天保五年(一八三四年)最初の牛市が開催された。牛比べが知れ渡ったせいもあり集まった牛は予想外に多く辰五郎は大成功に喜んだ。一番喜んだのは牛飼いの農家だった。今までは、牛を売るには、いつ来るか分からない牛馬商を待つしかなかった。やって来ても、直接農家の庭先で売っていたので殆どが足元を見られて買い手側の言い値にたたかれた。ところが、牛市では値段をごまかす訳にはいかない。おかしなことをしている牛馬商だと言われたら千屋だけでなく他所

の牛市でも行けなくなる。農家が牛を売って手にした金は、これまでより比べ物にならないくらい多かった。「太田の旦那は、いい人だ。自分だけ儲けりゃあいという人が多い中で、わしらにも儲けさせてくれた。ほんとに、ありがたいこっちゃ」。村人たちは口々に感謝した。たちまちに生を飼う家が増えて行った。天保六年(一八三五年)



▶旧太田邸のみごとな石垣

春、西日本一帯に豪雨が襲い、大洪水と成り大きな被害が出た、鉄穴流し場の溜まっていた土砂も流れた。これによって高梁川下流の足守藩が農民代表を押し立て上流の鉄山業者を倉敷代官所に訴えた。「あいつぐ鉄穴流しの濁流で溜まっていた土砂が、此の度の洪水で一気に流れ出し作物を押し流してしまっただけか、田畑までも埋まってしまった。これでは下流の農民は暮らしていけない。よって、今後、鉄穴流しの開始時期を秋の彼岸より一カ月遅くし、終わりを春の彼岸より一カ月早めてもらいたい」と言う内容だ。六カ月の仕事を4カ月に短縮しろとの要求だ。年中仕事をしたいのだが、田植えから稲刈りまでは水が濁るといけないから休んでいるのに、更に短縮せよとは。川上の人間は生きるな、と言っているのに等しく、受け入れられない。

しかし、辰五郎は農民たちが進んで訴えたのではないことを知っていた。足守藩には、祖父の三左衛門の代から何度も金を貸していて返してもなかったことがない。その額は合計三万両、現在の金額になおすと六十億円に成る。あわよくば太田家から貸した金は返さなくてもいい、と言ってもらいたいのが狙いようだ。

裁判では、相手は鉄穴流しの期間を短くしろの一点張り、

川上の人間も生きて行かなければならないので譲れない、いつまでも平行線のままである、そこで辰五郎は、「分かり申した。鉄穴流しで被害を受けているのは川添の田畑でしょう。さすれば、その田畑をすべて買い受けましょう。その田畑はそのまま作り頂いてもかまいません。作物もご自由に頂きたい。これならば不服はございませんまい」、これを聞いた足守藩の農民代表は、あわてた、田畑を買ってもらった上に、自由に使っていいとは、全く損をしない。こんな良い条件を出されては、断る理由がない。

しかし、この裁判の主人公は足守藩である。はい売ります、とは言いたくとも言えない。言葉をぐつと飲み込み、「そ、それは・・・」と答えるのがやっとだった。持ち帰って検討することに成った。裁きをする代官所の方も裏に足守藩がいることを知って居ながら、いい条件だから田畑を手放せとは言えない。後で問題が起きるのが分かっている。訴えを取り下げるように説得したようである。裁判に勝った。金の力で・と言えなくもないが、読みが正しかった。陰で糸を引く人間がいなければその場で回答が出せないことを、辰五郎は見抜いていた。

裁判に負けた足守藩は、悔しがった。期間を短くしろと言っても、はいと聞く訳がない。それなら、我慢するから金で保障しろと言うつもりだった。計算が狂ってしまった足守藩は幕府勘定方(最高裁判所)



▲太田家墓地

に訴えた。千屋は幕府の直轄地。小さな藩とはいえ大名、江戸屋敷にいるぶんだけ有利、役人の中に知り合いもいるので、うまくいくと味方に成ってくれて勝てるとうふんだ。

天保九年(一八三八年)秋、辰五郎は、幕府勘定方から呼び出しを受け、江戸に向かった。

当時、日本は鎖国政策を取っていたが一八〇〇年代に入ると諸外国は開国を迫って来ていた。一八〇八年辰五郎七歳の年、イギリス船フエートン号が長崎の港に侵入した。防げなかった長崎奉行が責任を取って自殺する事件が起きた。次々とやって来る外国船に手をやいた幕府は、とうとう異国船打ち払い令を出した。外国の船を見つけたら攻撃して沈めてしまえ、と言う乱暴な命令だ。一八三七年勘定方から呼び出される前の年、幕府とアメリカ船が衝突、日本の大砲では攻撃してもアメリカ船は鉄製の船、たとえ命中してもききはない。こうした時代の中で、鉄穴流しの期間を減ら

せ、と言う訴えが勝つはずがない。これからの時代は鉄がなければ外国と対等に渡り合えないと幕府は身をもって感じていた。足守藩の訴えは又も退けられた。

三年に及んだ裁判に勝ち、千屋に戻った後、加賀百万石の江戸屋敷を真似て家を建てることにした。五年の歳月をかけ完成し

た太田家は、四十を超える部屋の立派な母屋に、土蔵十三棟下男、下女の住まいを各一棟高い塀に囲まれた広大な屋敷だった。その後火災で焼けてしまった。今では、亀甲積と呼ばれる立派な石垣と濠が当時の面影を残している。

千屋の牛市は、明治・大正・昭和と全国

に知れるほど有名に成ったが農業の機械化が進み閉鎖された。鉄穴流しも近代製鉄技術の躍進により衰退していった。千屋牛は今では高級ブランド牛として愛されている。太田辰五郎と鉄穴流し・千屋牛の歴史は高梁川上流の人々にいつまでも消えることなく語り継がれていく。※第8頁に参考資料

太田辰五郎は 開国前から、誰よりも早く 資本主義的経営をやっていた

元吉備国際大学教授 白井洋輔(当会顧問)

太田辰五郎は、幕末において岡山でもまれに見る大富豪となり、終始情熱的で、ひたすら地域のことを考えながら資本主義的な経営をした。彼は家業の砂鉄製鉄を核に、日本ではまだ誰も産業革命も知らない時代に、あらゆる産業や人や環境をリンクさせ、よどみなく回転させる方法で利を生んでいった。

当時製鉄は、山を崩し、カンナ流しで砂鉄を得て、集めた砂鉄は高殿(こうどの)タタラで木炭を使って溶解した。その時使用する木炭は県北西部山間一帯の雑木林を伐採して、製炭した。それを当時最大の重工業(製鉄)のエネルギーにした。

そして林を切った後は膨大な草山に変わっていった。その草山に牛を放し飼いす

ることを思いつき、農家に奨励した。さらに冬の舎飼いで堆肥(たいひ)が生産され、それは水稲の肥料とした。飼った牛も農耕にも使うが、増殖肥育で農民の現金収入を増やして生活を向上させた。牛市や品評会を盛んにすることで、わき上がる向上心に一層呼応し、全国で二番目の優秀種牛を購入して千屋牛の品種改良を図り、やがて全国品評会で首座を占めていった。その牛市は資本や人や物や情報や文化の交流の場となったのも当然であった。

蓄積し続ける巨万の富で多額の大名貸しをするだけでなく、農民救済、社会事業にも活用した。牛の病気にも気を配り、若者を獣医にするための大阪に留学までさせている。

さらに当時わが国で最も人気の高かった大慶直胤(たいけいなおたね(刀剣の名工))を千屋に招いて、千屋鉄で刀を打たせ、千屋鉄で打ったことを銘記させた。それは全国に向かつて千屋鉄ブランドを一気に高める等々、次々と打ち出す新機軸が全て連鎖し、また都会と地方を対等に結び付けてもいる。

日本にまだ産業革命が起こっていない鎖国の時代に、地方が疲弊し、都会が心を失っていく現代の資本主義よりも高尚な先進的経営哲学をもった人が岡山にはいたのである。

白井洋輔氏

元岡山県立博物館副館長。平成二十六年、岡山県文化賞を受賞されました。

平安時代の大鎧(よろい)「赤韋威鎧(あかがわおどしよろい)」の県外流出を防ぎ、国宝指定の端緒を開いた。県文化振興審議会会長を務め、文化の振興、文化財の保護・保存・活用に尽力されている。

当会の設立総会(平成二十二年十月)には記念講演をお願いしました。又、この度、当会の顧問に就任していただきました。

団体 紹介

備中倉敷学

会長 村田隆禪

(観龍寺住職)

「備中倉敷学」は倉敷の重要伝統的建造物群保存地区周辺の関係者(町衆が、地域の歴史・文化等を学ぶ会を旨指して発足させたもので、会名を「備中倉敷学」と命名しました。会員を口コミで集め、平成十七年十月に第一回を開催しました。

以来、見学会を兼ねた講演会を毎月(八月は休み)第二週の木曜日午後二時から開催してきました。倉敷公民館が共催で、その大ホールで講演会を開いています。会員だけでなく、広く一般の方にも事前申し込みが「次頁最下段へ」



▲ 左から 山根巖氏 村田隆禪氏 竹本弘子氏 山本均氏 2月例会(2/12)にて

連続講座(2回)終了 中山さん お疲れさま



中山亘氏を講師に、自らの著書『手遣いの民 足遣いの民』稲作文化と牧畜文化』(吉備人出版)で二回講座を実施した。
参加者は延べ四十三名で大好評だった。
講座終了時、「今後も元気で研究

に励んでください。」と花束が渡され、全員で記念撮影をした。
「中山さんには今後も他のテーマで講演や講座をお願いして欲しい。」との声が事務局に届いている。
受講者の池ノ内昌弘氏から感想文をいただいた。

中山さんに稲見さんが花束を

「手遣いの民」 昨年十一月に続く第2回の中山亘先生の講座である。前回の総論から「手遣いの民」の本題に入っていた。歴史から少し離れ、比較文化論である。日本の経済社会発展の特色という大きな話から始まり、日本文化・文明の創造と手(技)の役割、稲作農耕文化と牧畜文化の比較、そして手の文化への回帰と話が展開された。年初の会であり、本論に入る前にサミュエル・ウルマンの「青春」が紹介され、年齢ではなく心の持ちようで我々も青春であるという新年の挨拶があった。

近頃テレビなどで職人芸・手の技が紹介されている。日本人とは何かと問われると、手を遣う文化を持つ勤勉な民族である。勤勉さは手を遣う水田耕作・農耕からきている。阪神大震災の復興は日本人の勤勉さに寄るところが大きい。手の民はものづくり国にしている。日本の文明は世界の8大文明の一つと言え、独自のかな文字が手の民の文明である。手の文化形成の背景は稲作農耕から文字へという縮み志向で説明される。また、欧米の足の文化(狩猟)は水平思考であり、日本の手の文化(農耕)は垂直思考であるなど、日本人の手の民としての特性が語られた。

歴史の話ではないが農耕民族であり、大陸から200km離れた孤島できた歴史の中の日本文化論の間に、テレビ番組から最近の世相も入れ、難しい文明・文化論から身近な話題へと、垂直から水平に広がる幅広い講話であった。限られた時間ではやや消化不良に終わった感もあるが、文化論の知識だけでなく、自分は手の民か、足の民か、我

第八回歴研サロン

吉備の秦氏と岡山の人物

十一月十八日、山田良三氏(会員)が「吉備の秦氏と岡山の人物」をテーマに講演し、四十二名が参加した。

古代日本には数多くの渡来集団がある。中でも秦氏が最大の集団と言われ、日本の宗教、文化、産業など多くの分野で日本の古代国家成立に係わった。

吉備の古代国家成立にも秦氏は関わり、秦氏と関係する人物から日本の歴史に残る宗教家



など多数出ており、日本の歴史に足跡を残していると話され、吉備における秦氏の歴史と秦氏にかかわる人物などについて講演された。

▶講演中の山田良三氏

が手を見て考えてみる機会になったのではなかろうか。手の民を止めると日本は衰退するのだろうかなどの質問も寄せられた。改めて、日本人を手から見直す新しい史観を示していただいた。後楽園築庭についてなど、沢山の資料を用意していただいたので、機会があればまた、研究の続きを聞かせていただきたいものである。(池ノ内昌弘)

「前頁最下段から」なくても無料で参加して頂いています。

会員は、年一回バスでの県内の現地研修会と、身近な処でも通常では見られない所への見学会に参加でき、特典となっています。

講演内容は、地元、倉敷だけでなく広く備中地域にも広げ、また分野も多岐にわたって興味がわく演目を選び、講師もその話なら出来ると云う方をお願いし、実施してきました。

平成二十七年三月には百十二回目の例会となり、また十月には十周年を迎えます。講演会には常に会員・会員外の方を含め平均七十名前後の聴講者を数えます。

これからも「備中倉敷学」の会の趣旨に賛同される方の会員を増やし、「町衆」の力で会を盛り上げ、楽しく学んでいきたいと願っています。

入会先等はホームページをご覧ください。

例会

日時 毎月第二木曜日(八月休み)

午後二時〜三時半

場所 倉敷公民館大ホール

参加 一般参加も可(申込不要)

連絡 〇九〇―八九九九―一六二四

(山本)

案内 山陽新聞毎月木曜日「情報ひろば」に掲載

第九回歴研サロン

岡山の戦国武将群像

二月二十六日、田中修實氏(当会顧問)が「岡山の戦国武将群像」をテーマに講演し、四十三名が参加した。



田中修實氏

一般に使われる「武将」と主に学術用語の「領主」の違い、「戦国大名」の一般的・教科書的な説明から始め、備作地方の国人・国衆の生き様を判り易い形でまとめた。特に、室町幕府の四職家赤松氏と

第三〜六頁掲載

「太田辰五郎と千屋牛」

参考資料

山本範著『備中千屋のたたらと太田家』
新見ライオンズクラブ太田辰五郎生誕二百年記念誌『太田辰五郎物語』
藤原嗣治著『太田辰五郎物語』
田枝治義著『太田辰五郎物語』
太田忠久著『伝記・太田辰五郎』

その守護代浦上氏の下で、下剋上を果たした宇喜多直家と備作地方の代表的な国人領主(武将)の動向を、史料と『軍記物』から解説した。江戸期に確立した武士道の考え方と、中世の国人領主(武将)との世界観の違いを学んだ講座になった。

(山崎泰二)

連続講座4(二回シリーズ)

講師 白井洋輔氏(顧問)

①「岡山の文化財 甲冑について」

日時 六月九日(火) 十三時半

②「岡山の文化財 備前刀について」

日時 七月七日(火) 十三時半

連続講座3(二回シリーズ)

「日本神話について」

講師 熊代哲士氏(会員 吉備の中を守る会顧問)

日時①三月二十日(金) 十〜十二時

②五月二十九日(金) 十〜十二時

歴研サロン

第十回「宇喜多家の人々」

講師 天野勝昭氏(岡山歴史研究会

会長 元岡山市副市長)

お知らせ

第12回探訪会

吉備中央町探訪

日時:5月31日(日)

集合:岡山駅西口バスセンター
7時45分参加費:6千円(バス代/保険
/昼食代/資料代)

定員:49名(入金先着順)

探訪地(旧賀陽町)

- ・吉川八幡宮・大塚古墳
- ・重森三玲庭園・鬼突き石
- ・大村寺・袈裟掛け岩
- ・大八幡神社・工藤一族墓地
- ・東豊野神社・主基齋田地
- ・川合神社・具束山妙本寺等

昼食

- ・吉備高原リゾートホテルの弁当

※ 探訪場所の変更あり

参加申込 岡山歴研事務局へ

●会員の出版物紹介●(過去一年以内)

『岡山「地理・地名・地図」の謎』

柴田一監修

漫画本『大月関平伝』

芝村哲三著

『華子随想集思慕・山田方谷』

芝村哲三著

日時 六月十六日(火) 十三時半

第十一回「緒方洪庵と岡山の門弟たち」

講師 大濱文男氏(会員 岡山人物銘々

伝を語る会会員)

日時 九月二十九日(火) 十三時半

「講座」「歴研サロン」とも

場所 きらめきプラザ二階大会議室

(旧国立病院跡)

参加費 会員・一般とも 五百円

定員 六十名・要申込(事務局)

『とつばあふ力 年番方筆頭事件帖』二、三巻
平茂寛著
『庄内半島の中世史 学館院記録所文書Ⅱ』
丸谷憲二著

■編集後記■ ついに半世紀前までは牛馬と共に生活が営まれていた記憶がある。ブランド「千屋牛」の陰に太田辰五郎さんの尽力があったことを初めて知りました。「備中倉敷学」で荒本文十郎に関する講演を聴いた。記事はできるだけ客観的にまとめた積りだったが、学芸員はさらに客観的に話をしたのには感心した。(楠)

発行 岡山歴史研究会

会長 天野勝昭

編集長 楠敏明

事務局 〒701-1332

岡山市北区平山 844-86 山本方

電話 086・287・6226

